

活動性肺結核患者における咳関連QOLの検討

鈴木 貴人, 遠藤 慶成, 田中 悠子, 渡邊 裕文, 下田由季子, 林 一郎,
櫻井 章吾, 三枝 美香, 赤松 泰介, 山本 輝人, 穴戸雄一郎, 秋田 剛史,
森田 悟, 朝田 和博, 白井 敏博
静岡県立総合病院 呼吸器内科

【背景と目的】咳嗽は結核患者の主要な症候の一つであり、診断の契機となる一方で患者のQOLを低下させ得る要因である。慢性咳嗽の診療において結核に代表される感染性咳嗽は、慎重に除外されるべき対象であるが、QOL低下の程度や治療による改善の有無などは明らかでない。今回、活動性肺結核患者における咳関連QOLについて前向きに検討した。

【対象と方法】対象は2014年7月から2015年6月までに当院に喀痰塗抹陽性の活動性肺結核として新規入院した111名のうち、問診が可能であった73名(男性43名, 女性30名, 平均年齢71(21-97)歳)。入院時と退院時にLeicester Cough Questionnaire (LCQ) 日本語版(新実・小川訳), Cough and Sputum Assessment Questionnaire (CASA-Q) 日本語訳(Boehringer Ingelheim)を実施した。治療前後の各スコアの変化および、咳関連QOLと臨床所見との関連について検討した。

【結果】入院時のLCQ total scoreは平均値16.26(満点21.00)と低下し、physical domain優位であった。CASA-Qでも、咳症状平均値72.92(満点100.00)、咳インパクト平均89.84、痰症状平均82.71、痰インパクト平均95.689と障害されていた。LCQとCASA-Qの間には有意な相関を認め、結核治療後で多くの項目は有意に改善した。咳関連QOLと画像所見や排菌量、気管支結核の有無には関連を認めなかった。

【結語】活動性肺結核患者では治療開始時に咳関連QOLが低下しているが、治療により改善することが明らかとなった。さらに症例を集積し報告する。